

秋田城跡

第 114 次発掘調査現地説明会資料

2020 年 7 月 23 日 (木)



秋田市立秋田城跡歴史資料館

史跡秋田城跡第 114 次発掘調査について

1. 遺跡の概略（第 1 図）

調査対象の史跡秋田城跡は、秋田市西部、寺内地区を中心とする標高 40～50 m の通称高清水丘陵上に位置しています。古代城柵^{じょうさく}の遺跡であり、古代秋田の行政・軍事・文化の中心地としての性格を持つ遺跡です。

古代城柵は、奈良時代から平安時代にかけて当時の律令国家^{りつりょうこっか}が、蝦夷^{えみし}の人々が暮らす東北地方各地に、地域支配の拠点として設置した大規模な地方官庁(役所)です。「城柵」と呼ばれたそれらの遺跡のうち、秋田城跡は最北に位置しています。

秋田城跡は、天平 5 年(西暦 733 年)に庄内地方から秋田村高清水岡^{たかしずのおか}に遷された出羽柵^{でわのさく}として創建され、天平宝字年間頃(西暦 760 年頃)に秋田城と改称し、改修されています。発掘調査により、平安時代初め(8 世紀末から 9 世紀初め頃)の大改修、天長 7 年(西暦 830 年)の大地震^{てんちよう}、元慶 2 年(西暦 878 年)の元慶の乱^{がんぎよう}を経て、10 世紀中頃まで存続したことがわかっています(表 1)。

また、遺構として、外郭^{がいこく}と政庁からなる二重の基本構造と城内外施設が把握されています。外郭区画施設の区画範囲は東西・南北約 550m で、南・東・西門が確認されています。城内には中心施設の政庁のほか、居住域^{きょじゅういき}、鍛冶^{かじ}等の生産施設、倉庫群などが確認されています(第 1 図)。

秋田城は奈良時代から平安時代を通じ、出羽国^{でわこく}(現在の秋田・山形両県域)の重要拠点として機能していました。奈良時代には出羽国府^{でわこくふ}(現在の県庁に該当する役所)が置かれたと考えられています。また、津軽^{つがる}(青森)や渡嶋^{わたりしま}(北海道)などの北方の蝦夷との交易と交流の拠点として、さらには大陸の渤海国^{ぼっかい}との外交拠点としても重要な役割を果たしたと考えられています。

秋田城は、その重要性から昭和 14 年に国の史跡に指定されています。現在の史跡指定面積は、約 90 ヘクタール(90 万 m²)です。昭和 34 年から同 37 年にかけて、国の文化財保護委員会による国営発掘調査^{こくえいはっくつちようさ}が実施され、昭和 47 年から現在まで秋田市が発掘調査を実施しており、今回が通算 114 回目の調査となります。

2. 第114次調査（焼山地区北西部）の概要について

秋田城跡第10次5ケ年計画の4年度目

調査地 秋田市寺内焼山 215-2 番、215-3 番

調査予定期間 4月27日～8月上旬

調査予定面積 300 m²

(1) 調査地の位置と調査目的（第1図・第2図）

第114次調査地は、城外の北西側、^{やげやま}焼山地区の北西部にあたります。

焼山地区の北西部では、これまで^{がいかく}外郭西門跡や門に取り付く^{にしへん ぼくへん}外郭西辺・北辺の城壁が確認されています。また西門から城外・城内へ延びる^{どうろせいち どうろそっこう}道路整地と道路側溝をそれぞれ検出しており、城外西大路・城内西大路の存在が確認されています。

他に今次調査地の東側では、古代の他に、第92次B調査地で中世の土塁や門、材木塀などが確認されており、16世紀後半を中心に砦のような施設として利用されたと考えられます。調査地の西側隣接地には、8世紀から9世紀と14世紀後半から16世紀中葉を中心時期とする^{うしろじょう}後城遺跡があり、古代の他に、周辺に中世の生活域が存在したことが確認されています。

今回の調査地は、外郭西門から西側約120mの地点となり、確認されている城外西大路の延長線上に設定しており、城外西大路の位置および実態の把握を行うため、調査を実施しました。また、周辺調査成果をふまえ、中世含めた焼山地区北西部の利用状況を把握するため調査を行いました。

(2) 今次調査の発見遺構について（第3図）

今次調査では^{きんげんだい}近現代にかけて^{ぞうせい}造成された層、^{ちゅうせい}中世に^{せいち}整地・^{けいせい}形成された層、古代に整地された層を確認しました。

現在検出している^{いこうめん}遺構面の大半は出土遺物から中世以降に整地されたと考えられ、特に中央部はしまりの強い整地となっています。また、中世の^{せいちそう}整地層は上層と下層があることがわかりました。

^{たいせき}堆積状況確認のため掘り下げたところ、中世以降に形成されたと考えられる分厚い^{とびすな}飛砂層が存在しており、その下層に古代の整地層を確認しました。古代の整地層はしまりの強い粘質土^{ねんしつど}によって構成され、新旧2時期が確認されています。その下部には^{さしつど}砂質土による整地がなされ、以下は^{じやまひさそう}地山飛砂層となっていることを確認しました。古代の整地層はその位置や状態から、城外

道路に関係すると考えられます。

調査地の旧地形は、東から西へ下る斜面だったと考えられますが、中世や現代の造成によって大きく削平を受け、現在は段上の地形となっています。また、西側は大きく削平を受けていることが確認されました。

遺構としては、近世以降の遺構として、溝が3条検出されています。

中世の遺構として、集石遺構1基、土坑12基が確認されています。古代の遺構については確認されていませんが、道路の造成土と考えられる整地が確認されています。

【中世の遺構検出状況について】（第3図）

調査地全域で、中世の宗教（仏教）関連遺構が確認されています。

調査地北側では、直径約4mの範囲に小礫が円形状に敷き詰められたSX01集石遺構が確認されました。詳細な機能は不明確ですが、周辺の火葬墓とあわせ宗教的機能を持つ遺構と考えられます。

調査地全体で、火葬墓と考えられるSK01・SK05・SK07・SK08・SK09・SK10土坑が確認されています。土坑自体の大きさにはばらつきがありますが、どれも円形から楕円形を呈し、火葬骨片・少量の炭化物が確認されています。土坑自体には焼けた形跡はなく、骨片は直径20cm程の範囲に集中し、いずれも焼けており、炭化物も少量であることから、別の場所で火葬したものを改めて埋葬していると考えられます。鉄釘が副葬されたものがあります。検出された土層の模鑄銭などの出土遺物から、16世紀から17世紀始めごろの遺構と考えられます。

また、それらより下層の中世に形成された砂層面からも火葬墓と考えられるSK11・SK12土坑が確認されています。共通して炭化物を多く含んだ埋土を持ち、長軸1m前後の楕円形を呈しています。これらの検出層からは、中世陶器などが出土しており、土層の堆積状況から、上層の火葬墓群とは時期差があると考えられます。

その他の同じ検出面で確認されている土坑についても、まとまった骨等出土は確認されていませんが、骨片や炭化物が確認されていることから、火葬墓となる可能性があります。

調査地中央のSK06土坑からは砂岩製の石製品と、花崗岩製の棒状石製品が出土しています。このSK06の直上部からは大量の骨片が出土しており、この地点にも墓があった可能性があります。砂岩の石製品は、五輪塔の火輪と呼

ばれる部分であると推定され、寺院や周辺墓群じいんに関わる構造物が存在し、土坑はいきに廃棄または墓ふくそうに副葬されたものであると考えられます。

また、調査地東側トレンチと調査地中央にかけて粘土整地が認められ、第92次B調査地で検出された中世とりで砦じょうもんの城門から伸びる道路となる可能性があります。

【古代の遺構検出状況について】（第2図）

古代の道路遺構に係る整地層が、調査地の東側と西側に設けた南北方向トレンチの下層より確認されています。

東側トレンチでは、中世整地と古代から中世にかけて堆積した砂層の下層から、明黄褐色粘質土と飛び砂が互層になり固くしまった整地層を、南北約8mの幅で確認しました。整地層の上面は平らでやや硬化しており、斜面下方に東西方向に伸びると推定されることや、その検出層位や位置関係から、古代の城外西大路に係るSX02道路遺構となると考えられます。

西側トレンチでは、古代から中世にかけて形成された飛砂層の下部より、炭化物を多く含んだ暗褐色の粘質土層を確認し、その下層から明黄褐色粘質土の整地層を確認しました。整地層上面の出土遺物などから、古代の整地層であると考えられます。粘質土を使い、固く整地されていることからSX02道路遺構の延長部分となると考えられます。

3. 第114次調査の出土遺物について

今回の調査では、主に中世から近世にかけての遺物が確認されています。主として、中世陶器すずけい（珠洲系中世陶器・常滑焼・瀬戸美濃焼）や銭貨せんか（模鑄銭もちゅうせん）が出土しています。中世陶器の年代は12世紀後半から16世紀と幅があります。銭貨（模鑄銭）の年代は、16世紀から17世紀初めを中心としています。

また、秋田城が機能していた奈良時代から平安時代の土器かわらへんや瓦片も確認しました。

4. 第114次調査の成果と課題

調査の結果、中世の墓域と古代の道路遺構とそれに係る整地層を確認し、周辺の利用状況を把握することができました。

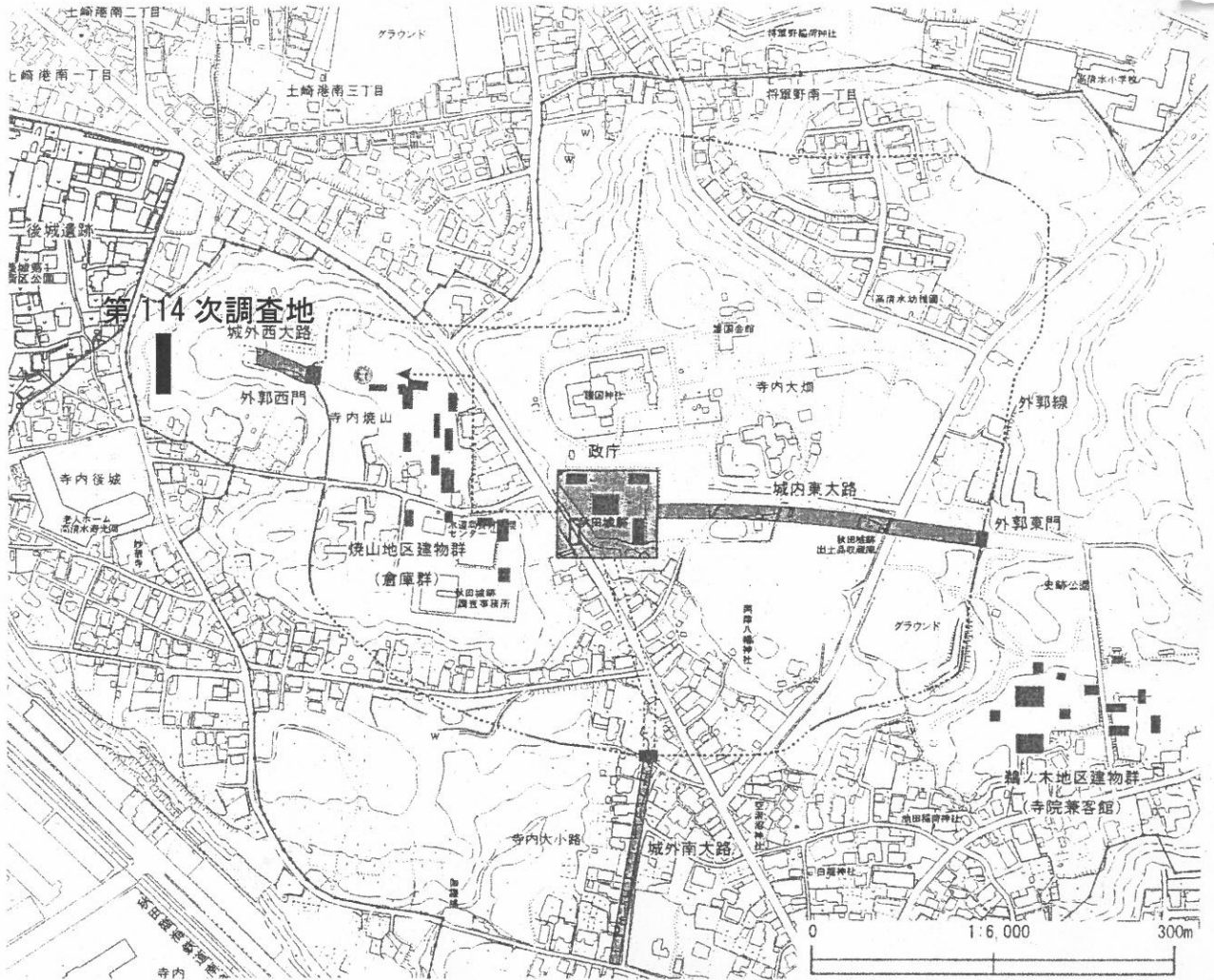
中世については、焼山地区北西部、特に城外西側では、第92次B調査や103

次調査で確認された火葬墓と合わせ、中世において墓域が広がり、仏教に関する宗教的な利用状況があることが改めて確認されました。

SX01 集石遺構は、周囲の火葬墓地とあわせ、中世の集石火葬墓遺構となる可能性があります。また、SK06 出土の五輪塔の一部と推定される石造物と合わせ、周囲に寺院が存在した可能性が考えられます。文献資料によると、今次調査地周辺は、中世前期の14世紀に建立され、近世初頭に久保田城下へ移転した湊三カ寺の一つである大悲寺が存在していたと推定される場所であることから、確認された仏教関係遺構は、中世寺院に関係する可能性があります。

古代については、奈良時代から平安時代にかけての城外西大路に関する道路遺構と整地層を確認し、外郭西門から、尾根を下り西側の後城遺跡方向へ向かう道路の位置関係を把握することができました。今後、掘り下げなどを行い、さらに道路整地層の年代と変遷について、追究していきます。

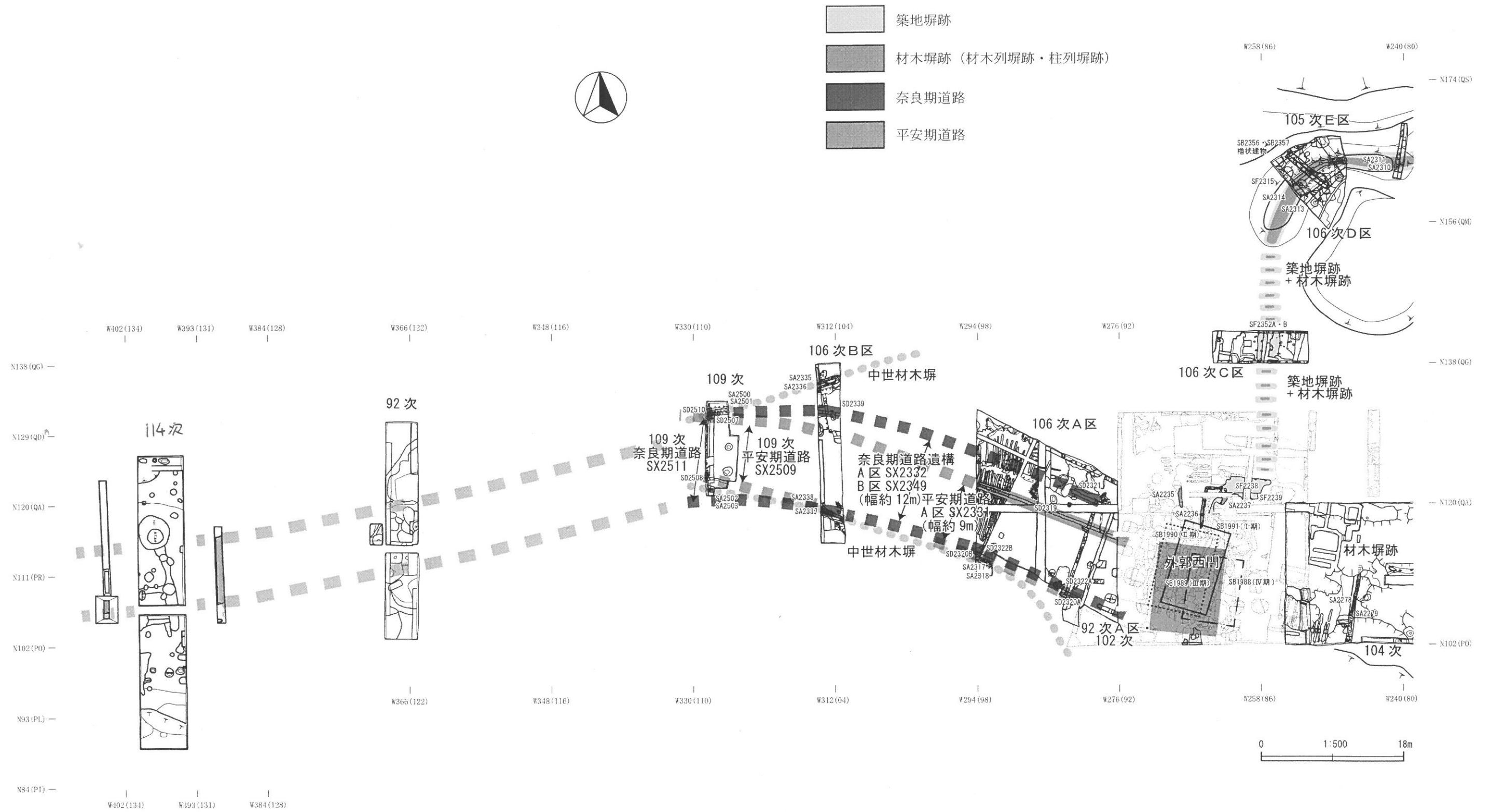
【MEMO】



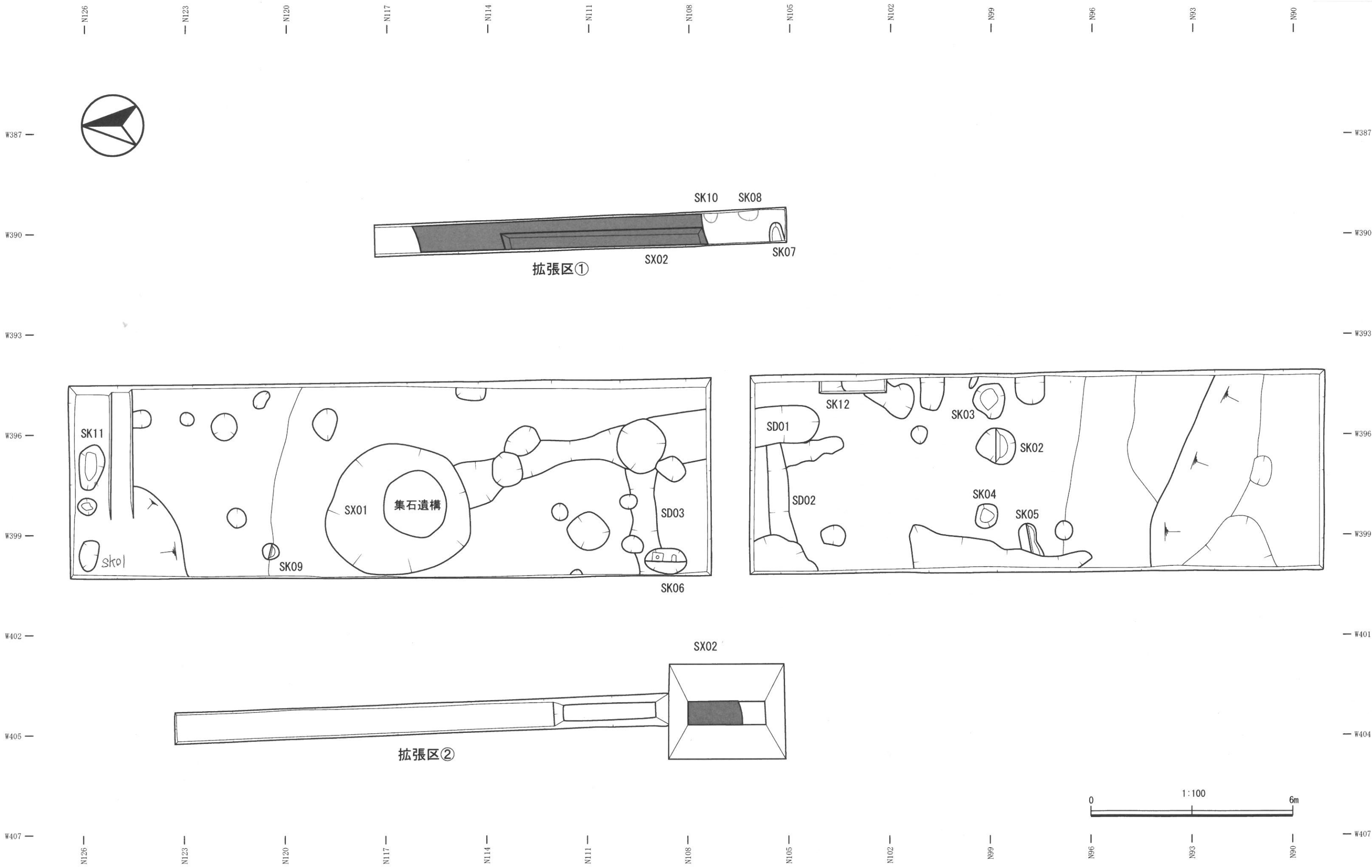
第1図 秋田城跡発掘調査位置図

表1 秋田城遺構変遷表

| | 733 | 750 | 800 | 830 | 850 | 900 | 950 | |
|--------|------------|------------------------|-----------------|------------------------------|--------------------|-----------------------|--------------------|-------|
| 政庁 | | I期 | II期 | III期 | IV A期 | IV B期 | V期 | VI期 |
| 政庁区画施設 | | 築地塀 | 築地塀 材木列塀 | 一本柱列塀 | 一本柱列塀 | 一本柱列塀 | 材木列塀 | 一本柱列塀 |
| 外郭 | | I期 | II期 | III期 (小期あり) | | IV期 (小期あり) | V期 | |
| 外郭区画施設 | | 瓦葺き築地塀 | 非瓦葺き築地塀 | 柱列塀 | | 材木列塀 | 大溝 | |
| 大畑地区 | | I期 | II期 | III期 | IV期 | | V期 | |
| | | | 生産施設 | 生産施設整備 | 生産施設充実 居住域住居数増加 | | 官衙建物 | |
| 焼山地区 | | I期 A類建物 | II期 B類建物 | III期 (小期あり) C類建物 | | | D類建物? | |
| | | A類建物倉庫 | B類建物倉庫群か? | C類建物倉庫群 | | | | |
| 鶴ノ木地区 | | I期 | II期 | III期 | IV期 | | V期 | |
| 外郭西門 | | I期 | II期 | III期 | IV期 | | V期 | VI期 |
| 時期 | 天平5年(733)~ | 8C後半前葉~ | 8C末・9C初~ | 9C第2 四半期~ | 9C第3四半 期~ | 元慶2年 (878)~ | 10C第2四半 期~10C中葉 | |
| 備考 | 秋田出羽柵創建期 | 天平宝字年間 「秋田城」 改修期 | 第III期全体 大改修期 | 天長7年 (830) 大地震後 復興期 | 元慶の乱で 焼失 | 元慶の乱 (878)後 復興期 | 最終末期 | |



第2図 外郭西門周辺調査地遺構全体図



第3図 第114次調査地 検出遺構全体図 S=1/100